安中坊

山形県西川町

大江親広公入部八百年記念誌

目　次

Ⅰ 安中坊の由来 …… 1
はじめに …… 1
大江広元 …… 2
大江親広 …… 2
多田仁綱と大江氏 …… 3
親広随従家臣 …… 4

Ⅱ 鎌倉期以前の吉川 …… 5
奈良・平安期 …… 5
寒河江荘（平安期） …… 5

Ⅲ 親広以降の大江氏 …… 6
大江氏の土着 …… 6
漆川の戦い …… 6
寒河江大江氏滅亡 …… 7
最上氏臣下の安中坊 …… 7

Ⅳ 江戸時代の安中坊 …… 8

Ⅴ 発掘された安中坊 …… 10

Ⅵ 安中坊の遺産 …… 11

Ⅶ 大江親広公入部八百年記念整備事業 …… 12

Ⅰ 安中坊の由来

○はじめに

西川町には、鎌倉幕府と深い関わりを持った人物、大江広元・親広関連の歴史的遺産が残されています。町の先人たちが代々受け継ぎ、時代を越えて守られてきたものです。

2021年は、承久の乱（1221）の後に大江親広が西川町に入部してからちょうど800年とされる節目の年です。これを記念して「安中坊歴史公園」が完成しました。今回の冊子も同じく入部800年を記念としたものです。

「安中坊」とは、すでに出家していた大江親広が寒河江荘に入部してから称した名前です。

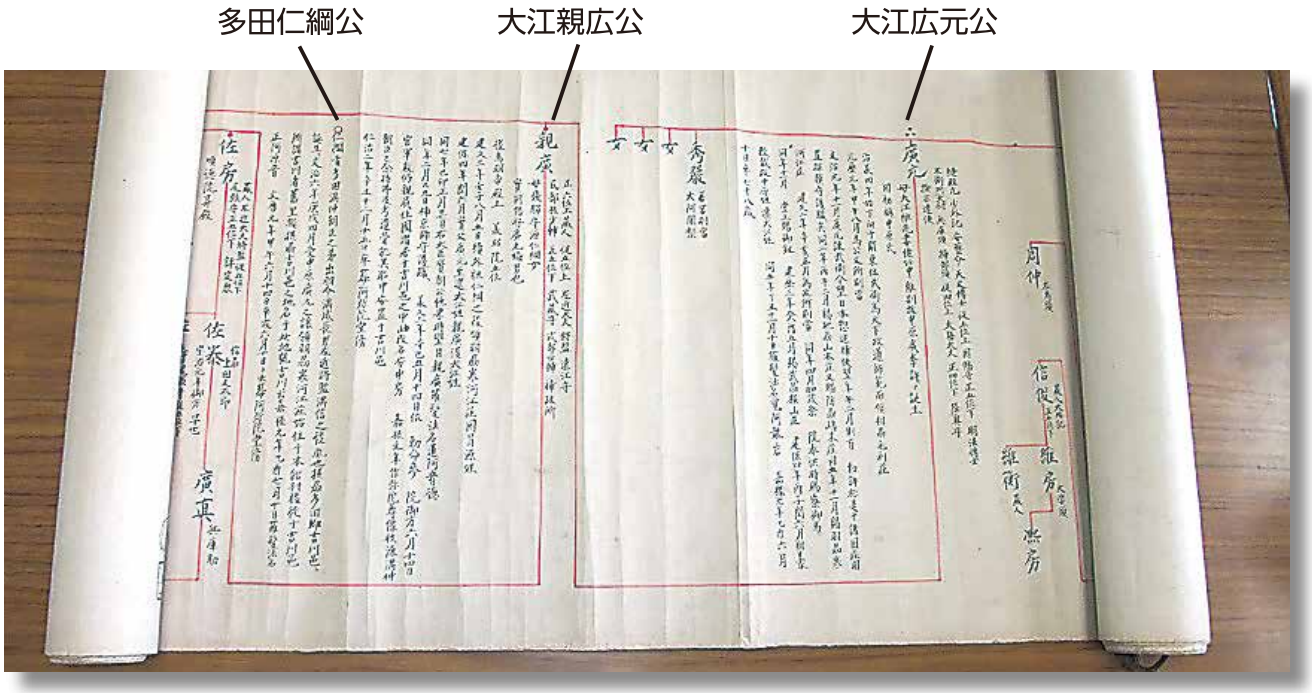
吉川の大江氏については、『吾妻鏡』『尊卑分脈』『天文本大江系図』『安中坊系譜』などが参考になります。その中でこれからしばしば登場する『安中坊系譜』について紹介します。通称『安中坊系図』と称し、安中坊大江家の所蔵で大江広元を初代として代々同家に伝えられて書き継がれてきた系図です。寛永二十年（1643）、代官松平清左衛門に安中坊道空が提出したものを道空の子義綱が書写したものが大江家宗家（山形市）に残っています。

『吾妻鏡』は鎌倉幕府の正史といわれるものです。特に大江広元の記事は多くあります。しかし、地方史の記録があまりなく郷土については『安中坊系譜』が重要となります。

大江氏の起源は、平城天皇とその第一皇子阿保親王を祖先に持ち平安前期に朝廷で参議を務めていた人物「大江音人」です。

大江一族は、学問を以て朝廷に奉じた文人貴族でした。子孫は、菅原道真に代表される菅家と並んで江家と称され、学問に秀でた存在です。

大江家八代匡衡の妻は、百人一首などの和歌集で有名な歌人赤染衛門です。その曽孫の匡房は、源頼義・義家（八幡太郎・源頼朝高祖父）父子の兵学の師として知られ、後三年の役（1083）における義家の飛雁の列の乱れから敵兵を知った故事は匡房の教えによるものといわれています。



安中坊系譜（西川町歴史文化資料館）

○大江広元

鎌倉幕府の政治に大きく関わった広元ですが、前述した匡房は曽祖父にあたります。実父は大江維光で中原広季の養子になったとされます。晩年（六十九歳）の建保四年（1216）に大江姓を名乗るまでは中原姓を名乗っていました。広元は、仁安三年（1168）、二十一歳で最初の官職縫殿允を賜っています。その後少外記、安芸権介などの官職を歴任します。寿永三年（1184）、広元三十七歳頃、源頼朝に招かれ補佐役（文官）として鎌倉に移り住んだようです。『吾妻鏡』にも初登場となります。鎌倉へは先に来ていた兄の中原親能と頼朝の縁もあったといわれます。頼朝は鎌倉に幕府を開くにあたって公文所と問注所を設けますが、広元は頼朝の信任が篤く、この公文所の別当（長官）に任命されます。

文治元年（1185）、平氏一門を滅ぼした頼朝に守護・地頭権が認められた時から鎌倉時代の始まりというのが最近の有力な説です。守護・地頭を設置する政策は広元が中心に練っています。また、頼朝は文治五年（1189）には、二十八万四千の大軍をもって平泉を攻略し平泉藤原氏を滅ぼします。

平氏一門、平泉藤原氏が滅びたことにより、広元は「相州毛利荘、肥州山本荘、防州嶋末荘、武州横山荘とともに羽州寒河江荘を賜った」と『安中坊系譜』に記されています。

広元は、出羽国・武蔵国・相模国・美濃国・伊勢国・近江国・摂津国・伯耆国・周防国・肥後国の一部に所領を保有します。まさに幕府の屋台骨を支える大きな存在でした。

大江広元公木像（吉祥院）

大江親広公木像（吉祥院）

多田仁綱公木像（吉祥院）

○大江親広

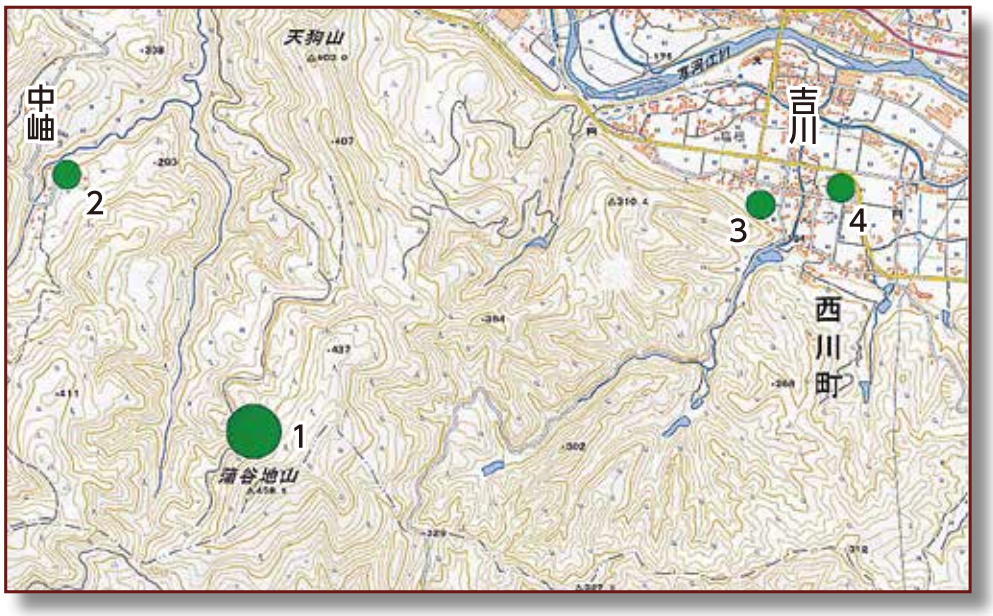
承久元年（1219）、鎌倉幕府の三代将軍源実朝が鎌倉八幡宮で甥の公暁に暗殺されます。広元の嫡男親広は側近として実朝のすぐ近くにいたそうです。親広は、弟長井時広と共に出家します。この時、幕府は朝廷の動きを監視するために親広と伊賀光季を京都守護職に任命しました。

親広は、内大臣源通親の猶子になっていたことから源親広を名乗っていました。広元の改姓に伴い大江の姓を名乗ります。広元には、親広をはじめ六男六女の子供たちがいます。四男季光は毛利荘に入り、後世の毛利元就に代表される大名を輩出します。また、六男の尊俊は慈恩寺に入ったとする系図があります。

源氏の正統が絶えたこの混乱に乗じて承久三年（1221）、後鳥羽上皇を中心とする朝廷の公家たちが討幕の兵を挙げます。世に言う『承久の乱』です。親広は、後鳥羽上皇の依頼を断り切れ

ず上皇方につきます。そのために親広は、幕府方の父広元や子の佐房・広時と争わなければならなくなりました。この争乱は、幕府方の勝利に終わります。後鳥羽・土御門・順徳の三上皇は、隠岐・阿波・佐渡に配流され、仲恭天皇は廃位させられました。親広は、近江国関寺周辺で行方不明になったと『吾妻鏡』に記されています。その後、「寒河江荘の吉川邑中岫に潜居した」と『安中坊系譜』にあります。地元では、「中岫」の先「向中岫」のさらに奥の「蒲谷地」といわれています。

大江親広潜居地推定



1 蒲谷地
2 向中岫
3 安中坊別当屋敷
4 阿弥陀屋敷

○多田仁綱と大江氏

『安中坊系譜』によると、広元の命を受け、寒河江荘に目代として派遣され入部して来たのは広元の妻の父多田仁綱でした。仁綱は、摂津多田源氏に連なるものとされます。仁綱が寒河江荘に入部したのは、文治六年（1190）とのことで、はじめ本楯（寒河江市）に屋敷を構えましたが、やがて吉川に移って来ます。吉川の地名は、仁綱の故郷である摂津吉川邑と地形が似ているからとのことです。

『承久の乱』で敗れた上皇側の親広の処分は、謹慎のような軽い処分だったのかもしれません。これは、父広元と義父である執権北条義時や義時姉、北条政子（鎌倉殿）の力が相当あったものと考えられます。

中岫から祖父仁綱の居る吉川に移った親広に父広元の死が鎌倉から伝えられました。嘉禄元年（1225）、広元は七十八歳で逝去します。

親広は、長男の佐房に依頼して鎌倉で阿弥陀像を造らせ、その胎内に多田源氏の祖である源（多田）満仲の念持仏と亡父の遺骨を納め、吉川に阿弥陀堂を建てて安置しました。親広を吉川に迎えた祖父仁綱は広元の死の一ヶ月後、仏門に入り阿弥陀堂の別当になります。仁綱は、文暦元年（1234）に亡くなり阿弥陀堂の傍に葬られます。親広は仁治二年（1241）に亡くなり、同じく阿弥陀堂の傍に葬られます。親広が亡くなる半年前に阿弥陀堂は館の鬼門に移されます。

因みに、南北朝期に成立した『師守記』によれば、親広は安貞元年（1227）に尾張で没したとあります。

阿弥陀屋敷大江親広公（左）・多田仁綱公（右）の五輪塔

○親広随従家臣

親広が落ちのびた時のわずかな家臣の中に、西川町では「吉川髙橋氏」と「入間佐藤氏」がおりました。そのことが『髙橋家系図』の満明脇書と『佐藤家系図』の基春脇書に記されています。親広は、月山神を勧請、神田二千束刈を寄進し満明を祭主としています。入間の地名は、旧地武蔵国入間郷になぞらえたことからで、基春は入間殿と呼ばれ入間神社の祭主に任ぜられたとされます。その外に、神社誌等から水沢の大江氏、稲沢の稲沢氏が考えられます。

吉川月山神社

入間神社

Ⅱ 鎌倉期以前の吉川

○奈良・平安期

西川町では、平成11年から15年にかけて安中坊別当屋敷とその周辺の発掘調査を実施しています。

その結果、平安時代前期（約千年以上前）の住居址がカマドを伴い安中坊遺跡東水田面（宇佐川左岸）から発見されています。特に須恵器（すえき）・赤焼土器の坏（つき）・甕（かめ）・壺・鍋などの生活用具と共に出土した『墨書土器（ぼくしょどき）（奈良期後半）』『布目瓦（ぬのめがわら）』から役所のような建物が想定されます。

墨書土器（須恵器坏）『由』

布目瓦

二枚重ね坏出土状況

○寒河江荘（平安期）

大江広元が地頭となった寒河江荘について述べます。西川町が属する寒河江荘が初めて史料に登場するのは、摂関家藤原忠実（ただざね）の日記『殿暦（でんりゃく）』です。天仁（てんにん）三年（1110）に「出羽守が予の荘寒河江荘に乱入、家司（けいし）（下級役人）が使わされる」とあります。乱入したのは、出羽守光国ですが、乱入されるほど寒河江荘が豊かだったと考えられます。参考に近くの大曽禰荘は「田多く地広し」とし、年貢欄に「布・水豹（アザラシ）皮・馬」とあります。寒河江荘は、『殿暦』に「寒河江黒栗毛、余の馬」との記事もあります。水豹は北方との交易からの産物です。また、土地柄として寒河江川の砂金も充分にあったはずです。

寒河江荘の成立は、忠実の曽祖父頼通（よりみち）の記録から十一世紀前半まで遡るようです。忠実の長子が忠通（ただみち）、弟が頼長です。寒河江荘は、保元の乱（1156）後に子の忠通に受け継がれます。この時忠通の家司として仕えていたのが広元の養父中原広季でした。また、頼長の子師長、さらに忠通の子松殿基房に家司として祖父大江維順（これのぶ）が仕えていました。広元は、久安四年（1148）の生まれですので摂関家の役人として巡検などで寒河江荘に来ていたのかもしれません。少なくとも豊かな寒河江荘の知識はあったと思われます。

Ⅲ 親広以降の大江氏

○大江氏の土着

蒙古の襲来が文永十一年（1274）、弘安四年（1281）にあり、二度とも幕府（執権北条時宗）は撃退しました。しかし、恩賞をめぐって御家人の不満が高まります。そんな中で弘安八年（1285）十一月に霜月騒動が起き、幕府の有力御家人の多くが北条氏によって攻め滅ぼされます。この騒動の中で地頭大江氏の寒河江荘入部があったとされます。安中坊七代元顕の時、『天文本大江系図』に「羽州寒河江持初也」とあります。

安中坊遺跡発掘調査において、この時期に比定する珠洲焼擂鉢（すずやきすりばち）が出土しています。

珠洲焼擂鉢

太郎阿弥陀堂五輪塔

元弘三年（1333）、新田義貞、足利尊氏等により倒幕の兵が挙げられ、ついに鎌倉幕府が滅亡します。『大沼大行院系図』によれば、元顕の弟広顕の長男貞広と次男親顕が幕府側にて討死します。三男懐顕、四男政顕が大江町の貫見に下向したとあります。近年、大井沢渋谷家から新たな『天文本大江系図』が発見され、大井沢と貫見大江氏、荻袋大江氏、左沢大江氏の関係が伺えます。この時期の資料として海味太郎阿弥陀堂の木製五輪塔があります。「元徳四年（元弘二年、1332）壬申六月二十一日　信性禅尼」とあり、西川町では最も古い紀年銘資料です。「信性禅尼」は、元顕の妻と推定されています。

○漆川の戦い

建武三年（1336）足利尊氏が京都に光明天皇をたて幕府再開（室町幕府）をすると、後醍醐天皇は吉野に逃れます。吉野の朝廷（南朝）と京都の朝廷（北朝）が両立します。当然、南北朝の間に争いが生じて全国に展開されます。出羽国でも南朝、北朝の戦いがありました。最上氏の祖、羽州管領斯波兼頼は、延文元年（正平十一年、1356）山形に入部します。

正平二十四年（応安二年、1369）、安中坊を宗主とする南朝方の大江氏一族は、兼頼軍と大江町の漆川で戦火をまじえることになり、安中坊十代茂信外一類六十一人が自害するなど大江軍は大敗します。この時、髙橋家九代信綱、十代運信も討死しています。生き残った安中坊十一代時氏は、斯波氏の意向からか寒河江に拠点を移すようです。寒河江大江氏の始まりで、以後寒河江大江氏が大江氏一族の中心となります。

○寒河江大江氏滅亡

寒河江大江氏最後の城主大江高基は、吉川基綱の長男で安中坊二十一代当主でありましたが、先代城主兼広に男子がなかったため兼広の娘を妻に寒河江を継ぎます。この仲介をしたのが執政で柴橋館主の橋間勘十郎頼綱でした。頼綱は、吉川元綱の三男で高基の弟にあたります。寒河江大江氏は、一時、反最上義光の天童氏や新興の白鳥氏との同盟関係などもあって天正十二年（1584）に天童氏、白鳥氏ともども義光によって攻められ滅ぼされます。 高基は大江町貫見の御館山にて自害します。この時、入間の入間右衛門介勝訓（かつより）が殉死しています。

安中坊を継いだ次男隆広も貫見にて自害しています。高基・隆広・頼綱の吉川三兄弟が義光との戦で敗死しました。

大江町・貫見の大江高基公と家臣の墓（右から二番目が勝訓の墓）

○最上氏臣下の安中坊

隆広の遺児乙若丸は、米袋をかぶり（米袋さまと称された）脱出、会津の芦名氏を頼ったとのことです。会津では、同地出身の天海法印に逢い法印に随従しその香剃（こうぞり）を受けます。

吉川では、最上氏に降った旧臣が義光に阿弥陀堂の再建を訴えて黒印を受け、乙若丸を呼び戻し、阿弥陀堂の別当に迎え入れます。乙若丸は、改めて安中坊二十三世良光を名乗ります。因みに、義光は慈恩寺三重塔、岩根沢日月寺、水沢月山神社なども再建しています。

良光は、義光の命により関ケ原合戦（1600）の勝利を祈祷する。その成果などもあり、義光から山形西田に千石を賜り、長子義康配下となります。しかし、義康は父義光の勘気から高野山に追放、その途中庄内松根にて従者ともども暗殺されます。その従者の中に良光と嗣子広道もおりました。

義光は次男家親に家督を継がせ、義康派の粛清をします。安中坊では、西田に賜った千石は召し上げられましたが、地元吉川は安堵されています。

Ⅳ 江戸時代の安中坊

概ね江戸期に安中坊を継いだのは良光の三男吉長であります。吉長の墓は、阿弥陀屋敷の墓地北面に現存しています。吉長は、羽黒山の修験を生業としながらも新たに寺無量寿院（むりょうじゅいん）を起こし江戸上野東叡山（とうえいざん）寛永寺に属します。吉長の子、安中坊二十七世道空は、『安中坊系譜』を作成、幕府に提出します。慶安二年（1649）、将軍徳川家光より阿弥陀堂領に御朱印百十八石九斗餘を拝賜します。

道空の弟に、羽黒山参道の石段や杉並木造成に寄与した羽黒山第五十代別当天宥がおります。

吉長・道空・天宥の記載された安中坊系譜（追加）

徳川将軍拝賜の御朱印箱

安中坊二十六世吉長の墓

羽黒山第五十代別当天宥法印

江戸時代の安中坊は、
26世吉長—27世道空—28世義綱—29世広興—30世広隆—31世広照—32世広義—33世広顕—34世広秀—35世広親—36世広豊—37世広信—38世広満（概ね通字「広」）と続きます。ほとんどが阿弥陀屋敷に墓石があります。阿弥陀堂、無量寿院は、広隆（元禄期）、広豊（天保期）の時代に再建されているようです。

文化二年（1805）七月「吉川村料地絵図」から

（吉川・太田静明氏所蔵）

V 発掘された安中坊

西川町では、平成４年に当時西村山地域史研究会会長の故阿部酉喜夫氏に安中坊大江家と阿弥陀屋敷の歴史的考証調査をまとめていただきました。

阿部氏の調査を踏まえて、安中坊の歴史的価値は非常に高く、今後の整備計画を策定するにあたり、前述しましたが発掘調査を実施することになりました。

〔予備発掘調査〕
平成11年10月19日～11月15日
〔第１次発掘調査〕
（前期）
平成12年５月22日～６月５日
（後期）
平成12年10月２日～11月23日
〔第２次発掘調査〕
平成13年７月２日～８月27日
〔第３次発掘調査〕
平成14年９月１日～10月２日
〔第４次発掘調査〕
平成15年９月16日～10月10日

１号井戸出土状況

１号井戸発掘状況

予備調査で早速、鎌倉時代の遺物（珠洲焼擂鉢）が発見されました。第２次調査では堀の確認のために水田面の調査を実施したところ、奈良・平安期の遺構・遺物が検出されました。吉川には、鎌倉期以前にもある程度大きな集落が存在していたことが分かりました。

結果として中世末と考えられる土塁状遺構・柵列遺構等が出土しましたが、概ね近世以降の遺構・遺物が主体の遺跡となるようです。その中で、阿弥陀堂別当が居住した安中坊の寺である無量寿院跡が確認されたのは特筆されます。

無量寿院は、江戸後期に再建されたものです。付随する井戸は約５ｍの深さで下部石組、上部桶状枠（３段）の立派なものです。後述しますが、山門が北部未調査区域（参道口）にありました。

発掘された無量寿院跡

Ⅵ 安中坊の遺産

慶応三年（1867）、徳川幕府の大政奉還により、安中坊も阿弥陀堂嶺の御朱印を上地することになります。また、明治の廃仏毀釈の際、安中坊は僧籍を離れ廃寺となります。食封を失った安中坊から離れた遺産が各地に現存しています。

無量寿院は、明治９年、吉川学校の校舎として明治27年まで使用されます。さらに、明治28年、山形市三日町常念寺に譲渡され庫裡として活用されています。

山形市・常念寺に移築された旧無量寿院（吉川学校）

山門は、明治５年に河北町溝延聞徳寺の山門となっています。

河北町・聞徳寺に移築された山門

寒河江市七日町法雲寺には、正面扉に大江家と多田源氏の家紋が附く阿弥陀堂厨子があります。この厨子の中の本尊阿弥陀如来は、朝日町玉ノ井無量庵の阿弥陀如来といわれています。また、阿弥陀如来の胎内に納めた念持仏が河北町谷地の田宮家に残されています。

寒河江市・法雲寺の厨子

朝日町・無量庵の
阿弥陀如来像

河北町・田宮家の
念持仏

阿弥陀堂については、廃寺と共に解体されたのかもしれません。阿弥陀屋敷の阿弥陀堂跡地と推定される場所には現在地蔵堂が建立されています。

大江家宗家は、初代大江広元から数えて現弘明氏（山形市）まで四十二代、八百余年の伝統を維持してきました。西川町では、昭和53年に「阿弥陀堂跡阿弥陀屋敷」、昭和55年に「安中坊文書（「安中坊系譜」など）」、平成24年に「安中坊別当屋敷跡」を指定文化財としています。

Ⅶ 大江親広公入部八百年記念整備事業

鎌倉時代から現代まで時代と共に変化し、歴史を繋いできた安中坊・大江氏。地域で長年受け継がれてきたその歴史は、西川町の歩みを考える上で重要な役目を果たしてきました。今後も町の歴史遺産として、未来へと継承され続けることを願います。

令和３年度、大江親広公入部800年を記念した「安中坊歴史公園」の整備が終了いたしました。

安中坊の寺「無量寿院跡」に盛土、月山眺望の「あずまや」の設置、火伏の神「秋葉山」の整備、石垣修繕、三基の井戸に「表示板」など分かりやすく、見やすくしています。

敷地面積：4,646㎡、総工費：15,728,900円
工　　期：令和３年５月17日（月）～９月30日（木）
竣 工 式：令和３年10月20日（水）

文化財は、歴史、文化の中で生まれ、育まれ、そして現在に伝え守られてきた貴重な私たちの財産であり、地域の歴史、文化などを理解するためには欠くことのできないものです。また、未来の文化の創造・発展の基礎となるものであり、一度破壊されると二度と再現することが不可能であるという性格をもっていることから大切に守っていきたいものです。

【安中坊歴史公園】

整備（盛土）された安中坊無量寿院跡

公園のぼり旗

１号井戸標石

２号井戸標石

３号井戸標石

秋葉山石祠

石垣修繕

「あずまや」の公園案内板

「あずまや」から初夏の月山を仰ぐ

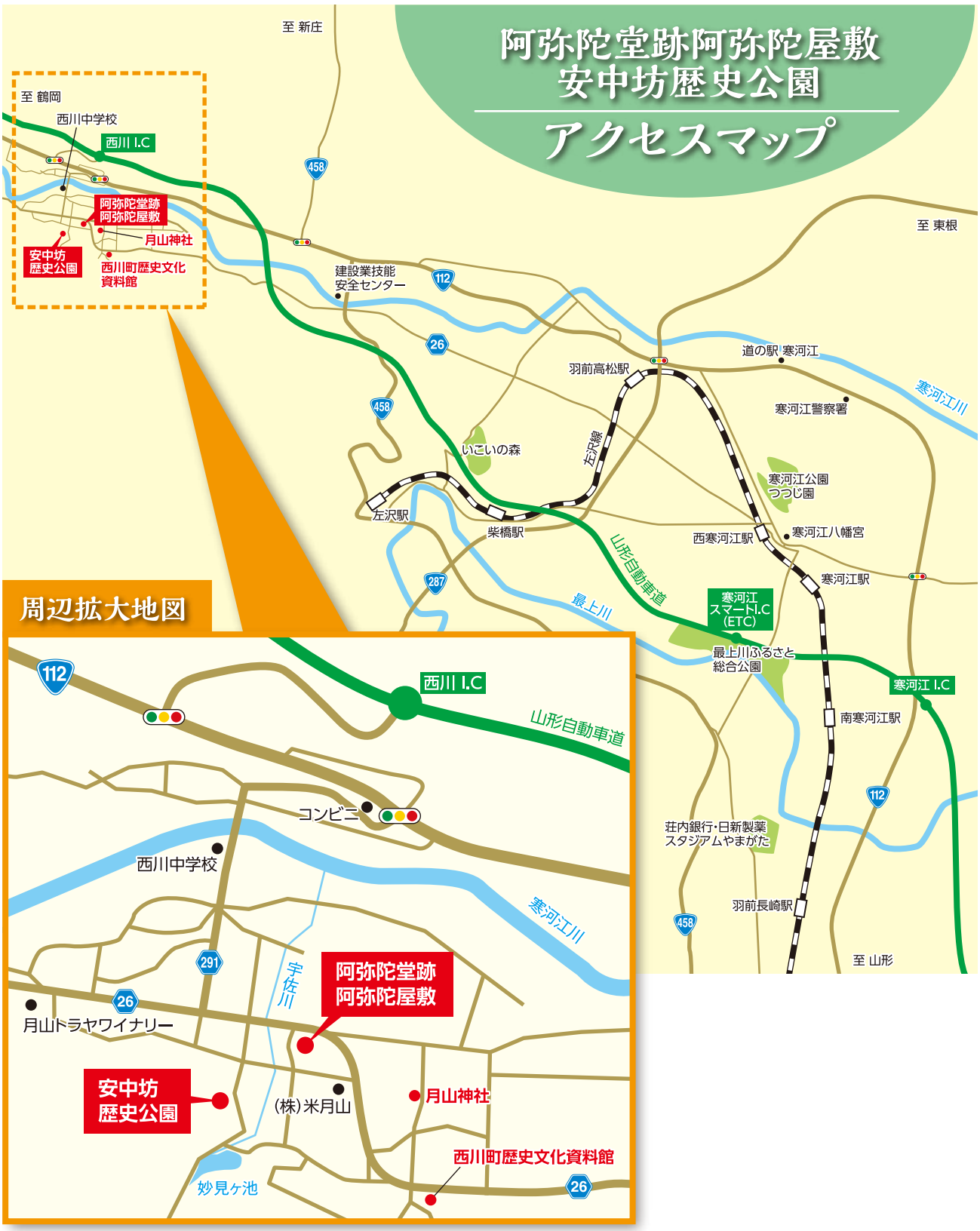
安中坊

大江親広公入部八百年記念誌

第一刷　２０２１年１１月
第二刷　２０２２年　３月
第三刷　２０２２年　７月

編集者　西川町郷土史調査員　清野幸夫

発行　山形県西村山郡西川町大字海味５１０
西川町教育委員会
電話　０２３７－７４－２１１１

阿弥陀堂跡阿弥陀屋敷 安中坊歴史公園

アクセスマップ